

2021年度
地球環境『自然学』講座
第7回

テーマ

本多静六の森づくり

吉野山の地域と風景の再生を目指して

講 師

奈良県立大学ユーラシア研究センター

客員研究員 岡本 貴久子 先生

2021年7月10日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

岡本 貴久子（おかもと きくこ）



1. 経歴

2007 年東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士課程修了、2014 年総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻博士課程修了、総合研究大学院大学課程博士（学術）。2014 年から 2021 年まで国際日本文化研究センター共同研究員。

2. 現職

2016 年より奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員、2020 年より公益社団法人大日本山林会林業文献センター運営委員会委員、2021 年より人間文化研究機構基幹研究プロジェクト連携研究員を務めている。

3. 所属学会 文化資源学会・美術史学会・生き物文化誌学会

4. 主な著書

岡本貴久子・末木文美士（共著）秋道智彌編『日本の環境思想の基層』岩波書店、2012 年

岡本貴久子「富士山信仰と近代日本の森づくり」『BIOSTORY』22、生き物文化誌学会、2014 年

岡本貴久子「空海と山水 命を治む」末木文美士編『比較思想から見た日本仏教』山喜坊佛書林、2015 年

岡本貴久子『記念植樹と日本近代 - 林学者本多静六の思想と事績』思文閣出版、2016 年

岡本貴久子「「苦蟲から恵比寿顔に」- 本多静六の一般社会へのまなざし」『日文研』57、2016 年

岡本貴久子「本多静六にみる都市美の理念と方法論」『都市公園』214、東京都公園協会、2016 年

岡本貴久子「日本の自然、日本の風景 - 中部山岳国立公園を仰ぐ本多博士の視点」『本多静六生誕百五十年記念誌 森と公園を愛した人』本多静六博士を顕彰する会、2017 年

岡本貴久子「「みどり」から見る明治期日本の風景と自然観一考」『グリーン・エージ』538、2018 年

岡本貴久子「私は「文化資源学」を研究しているか」『文化資源学』16、文化資源学会、2018 年

岡本貴久子・内藤一成・奈良岡聰智「戦後における国土保全論の勃興と国民啓蒙」『土木史研究 講演集 Vol. 39』、土木学会土木史委員会編、公益社団法人土木学会、2019 年

岡本貴久子「再考・本多静六その人となり - 大正 10 年大日本山林会吉野巡察一考」『神園』23、2020 年

岡本貴久子「全国植樹祭と河井弥八 - 国土緑化に向けたまなざし」『山林』1634、大日本山林会、2020 年

岡本貴久子（共著）瀧井一博編『明治という遺産 近代日本をめぐる比較文明史』ミネルヴァ書房、2020 年

岡本貴久子（共著）島蘭進・末木文美士他編『近代日本宗教史 第 3 巻 教養と生命』春秋社、2020 年

岡本貴久子「本多静六＜土倉翁造林頌徳記念碑＞を惟て - 祈りと実践-」『奈良に蒔かれた言葉と思想。V「近世・近代の思想研究会」調査研究レポート』奈良県立大学ユーラシア研究センター、2021 年

岡本貴久子「鯖鮓 古都ハレの日の「光りもの」若狭～京都」『BIOSTORY』35、2021 年

本多静六の森づくり - 大正期：吉野山の地域と風景の再生をめざして

<発表の構成>

序にかえて 本多静六研究について 「記念植樹と日本近代 林学者本多静六の思想と事績」

1 本多静六その歩みと学びの道

林学博士・経済学博士本多静六は如何にしてなり得たか

2 大正10年大日本山林会吉野山巡察一考

吉野の誉 <桜>と<杉>の文化的景観

(1) 本多静六「吉野山の桜制復古」

(2) 本多静六「土倉翁造林頌徳記念の磨崖碑」

結びにかえて 祈りと実践 「世界遺産紀伊山地の霊場と参詣道」(平成16年)

キーワード：祈りと実践、儀礼性・祭事性と実用性、いのち、生きたる記念碑、寄進植え、文化的景観

1. 本多静六その歩みと学びの道

本多静六（旧姓折原） 慶応2年7月2日～昭和27年1月29日 東京帝国大学名誉教授・正三位勲二等叙任

明治5年 学制公布 曹洞宗幸福寺本堂に設えられた小学校で学び始める

- ・ 三字経・与地誌略・四書など 漢学中心
- ・ 祖父折原友右衛門の教導と富士山信仰「不二道（小谷三志）」・「不二道孝心講」
- ・ 父親の急逝で苦学 → 「自分の自覚的努力の第一歩」『本多静六体験八十五年』講談社、昭和27年

明治13年 農閑期に上京、島村泰（大蔵省二等属）の玄関番兼書生

明治15年 農商務省山林局所管の東京山林学校開校

明治17年 静六、東京山林学校に入学

明治19年 農商務省所管の東京農林学校開校（駒場農学校と東京山林学校が合併）

明治22年 静六、元彰義隊頭取本多晋の娘詮子と結婚（婿養子）、本多姓となる

明治23年 農商務省所管東京農林学校を文部省所管帝国大学農科大学に改組

明治23年 帝国大学農科大学を卒業、ドイツへ私費留学、ターラント高等森林学校に入学

明治25年 ミュンヘン大学国家経済学部で博士号取得

明治25年 帝国大学農科大学助教授に就任（林学第二講座担任）

明治32年 『日本森林植物帯論』で本邦初の林学博士号を取得

明治33年 東京帝国大学農科大学教授に就任

本多静六にみる生活信条（本多静六『新人生観と新生活』伊豆美書房、昭和23年）

- ・ 「五つまで抱寝してくれた信心家のひいばから不二道孝心講の法話、特に天道様は見透した、陰日向をするなど毎晩、眠るまで話し聞かされた事が私の精神的健康上に甚だ有益であつたと信じます。」

- ・ 「私の実践した生活を更に健康長壽法らしくすれば次の八箇条となります。

(一) 幼少年時代に宗教的信仰を與えらるゝ外、粗衣粗食、夏は裸跣足で野獣のように育つたこと。

(五) 過去に執着せず、現在に即し、未来の希望に生きしこと。特に初めは微小なりとも、年と共に増大し行く仕事即ち植樹、著述、公園、風景地、慈善公益財團の創立、苦學生の世話等を選んで努力せしこと。」

「如水生」水の如く生きる (本多静六『私の生活流儀』実業之日本社、平成17年)

「私はかつて「如水生」という筆名を用いたことがある。それは、流水のごとく自由に、さらさらと、世に処し、生を送りたいと願ったからだ。水のごとくと言っても、水の姿にはいろいろとあり、怒濤逆捲く荒海の姿もあれば、洋々と流れる大河、潺々と楽し気に走る小川の姿もある。しかも私の、自らあらまほしく考えたのはその徳と力とである。中でも私は淡々として方円の器に従うというところが気に入った。すなわち、いかなる境遇にも自ら適応し、安住する。かつ澄み、かつ濁り、しかもいつかは、自ら貫くものを貫いていく。自分もぜひそうなりたいと念じたのである。したがって、水を見ならった私は、何事にも一切悲観しない。常住坐臥、すべてを「有難い 有難い」で過ごすことにつとめている。」

ドイツ留学時代の様子 - 修学記念の種子交換

(『明治二十三年洋行日誌 附・学位試験及び学位授与式の景況(明治二十五年)』本多静六博士を記念する会、平成10年)

「森林官が私に対してのご追従として「何時でも日本には鹿がいますか。貴方は狼をなさいますかと決まり文句をいう。…鹿を射るのが何の手柄だ、余り面白くないので、森林官の例の問いに対して、「私は射を好まない。生き物を殺して楽しみとすることは、私の好まないところである」と答えた。これには一言も返事がなかった。しかし私も余り処世の方に通じないのは頑固な答えだと思った。」

2. 大正10年大日本山林会吉野巡察一考 - 吉野の誉<桜>と<杉>の文化的景観

公益社団法人大日本山林会 (『大日本農會・大日本山林會・大日本水産會創立七拾五年記念』昭和30年)

明治15年 創立委員長品川弥二郎「国家の繁栄と人民の福祉を増進するには先づもつて原始産業の発達を図るにある」

第三十一回大日本山林会奈良県大会と吉野山視察旅行

※ 参考 写真集『大日本山林會大和之印象』(大和山林會撮影 大正10年11月) 成瀬匡章氏所蔵提供

10月8日～9日 奈良県公会堂 (第三十一回奈良県大会記事『大日本山林會報』472号、大正11年3月)

大会行事 総裁御令旨・会員総代答辞・表彰式・講演会・園遊会・活動写真(清澄演習林)等

10月10日 奈良市付近の史跡名勝・神社仏閣(春日神社・法隆寺・長谷寺・信貴山など)

10月11日 吉野林業・史跡名勝(吉野神宮など) 本多静六「吉野山の桜制復古」

10月12日 吉野林業・史跡名勝(吉野朝宮趾・蔵王堂・如意輪寺など)

10月13日 吉野林業・解散式(川上村高等尋常小学校) 本多静六「土倉翁造林頌徳記念の磨崖碑」

吉野林業の大家・土倉庄三郎(1840～1917)

「当時山林は仙人のやる仕事であつて、山林(三厘)は天保銭(八厘に通用)より安い学問だ、などと輕蔑されてゐた。私が二十五年にドイツから帰朝した頃に、やゝ完全に近いと思はれる林業は、わづかに大和の吉野と紀州の尾鷲の一部に當まれるにすぎず、一般的には林学林業の何であるかを知るものもなく、林業思想はきはめて幼稚、いたづらに濫伐暴採に任すのみであつた。このため次々に大洪水の惨害を蒙り、国民生活と国土保安から由々しき問題であることを痛感せざるを得ない状況にあつた。…当時民間には、金原明善、土倉庄三郎氏などが、森林濫伐からくる恐るべき水旱の惨害を防止するために、治山治水の運動に務められてゐた。」(『本多静六体験八十五年』)

（１）本多静六「吉野山の桜制復古」『庭園』大正10年12月・『大日本山林會報』472号、大正11年

「吉野山の特徴は南朝の史蹟と櫻花との二つである。史蹟は内務省史蹟名勝天然記念物調査會で保存管理の方法を講ずる處であるが、櫻樹は漸く枯れ盡して僅かに上、中、下の千本と、奥の千本とを止むるに過ぎない。今はそれ等の多くも名のみであつて樹勢振はず、古歌に 吉野山消えせぬ雪と見えつるは嶺つゞき咲く櫻なりけり と詠ぜられた山嶺の櫻の如きは見る影も無い。殊に文禄三年太閤秀吉が諸大名を引具して大觀櫻會を開いたと稱せられる所の如きも僅かに今其處にある一民舎に當時の遺跡を訪ね得るばかりであつて、附近は現在一面に杉又は雑木の林と化し櫻樹は唯だ杉林中に其根株を認め得るに過ぎないと云ふ慘状を呈して居る。若し之を今日の儘に放置したならば、啻に吉野の價値の大半を失ふのみではなく、延ては日本、否、寧ろ世界の櫻の本家を失ふに至るなきを保しない。」

貝原篤信「和州巡覽記」(貝原篤信「和州巡覽記」(元禄九年)『益軒全集卷之七』益軒全集刊行部、明治44年)

「凡此山は、六田の方の麓より奥の院まで、百餘町の間、民家なき所は、左右皆並木の櫻也。又左右の傍も、下の谷も、左右のかげなる所々の谷々にも、皆櫻多し。まれに杉有。二三月は、花の世界と云つべし。榎は谷底に多くして、山にはなし。春は麓より先花開初て、やうやく山に咲のぼりて、奥の院にておつる。麓の花盛過て、中の花盛になる。中の花盛過て、上の花盛に開く。其間大やう三十日許有。・・・山僧の曰、此四十年前は、今よりも此山に櫻多し。今は昔より少し。」

蔵王権現と桜の寄進植え (「和州巡覽記」・参考『吉野町史下巻』吉野町役場、昭和47年)

「此山にて、櫻を切事を甚禁ず。櫻木を薪にせず。故に樵夫櫻を賣らず。若薪の内に櫻あれば、里人は是をえらびず。是里人の偏に櫻を愛するにもあらず。蔵王権現の神木にて、惜み給ふと云ひつたへて、神の祟を畏るゝ故なり。」

和歌に詠む桜の寄進植え

「屋う／＼日もかたぶき侍れば 麓のさとにたちかへるとて蔵王権現の前に桜を三十本うへさせ侍りて

いつか又十といひつゝみよし野に わがうへをきし花をきて見む」 cf. 伊勢物語 第十六段

いつかまた三十年後にでもこの吉野に、私が植えておいた桜をやつて来て見よう（見にやつて来よう）

(底本『飛鳥井雅章卿吉野一覽記』(明暦3年、国文学研究資料館所蔵)

桜の苗売り

- ・「七曲 櫻うえふ」吉野山人謡春庵周可撰『吉野山独案内巻一(寛文11年・国会図書館蔵)』(古板地誌研究会、昭和46年)
- ・「史を按ずるに吉野の櫻は古來蔵王権現の神木として村民は一枝だも折るを恐れ、之を犯すものは佛罰を蒙ると稱してこを保護して來た。夫れのみではなく吉野七曲坂の沿道には櫻樹の苗賣りが居て、店に櫻苗と鋏とを具へて置いて、吉野に登る人々に櫻の苗を寄進せしめた事は『和州巡覽』を見ても明白な事實である。」(本多静六「吉野山の桜制復古」)

備考 本多静六の知名度の高さ (牛窪弘善「神變大菩薩傳」『修驗』53号、聖護院門跡内修驗社、昭和7年)

「さて當麻寺の落慶であるが白鳳十年といふから、行者四十八歳の時で、行者は當時大峰から法會に臨まれて、田園・山林若干頃を施入し、又櫻樹を手植されたのである。それは寺中の染野寺の地に、林學界のオーソーリチー本多博士の談に、千年以前に行者が杉を植えられたらしい。とあり、又箕面の紅葉も其の手栽に係るものだといはれてゐる。であるから行者の植林上の功績も大いに認めなければならない譯だ。」

カラス餅の風習 (『吉野町史下巻』昭和47年)

「毎年正月の餅搗きの日に、各家毎にわざわざ鳥を呼ぶ歌をとえながら餅を権現様のお使いと考えられる鳥に与える風習があった。この風習の真意は、結局吉野山の神木たる桜の実を、吉野山全帯に撒きちらして神木の増殖が保たれるのを感謝するためである。」

「実修実証」 ※ 修験は「修証験得」の義（山田廣圓・高井善證『修験大綱』神變社、昭和8年）

祈りと実践 - 吉野の桜の文化的景観

「吉野に於ては年々引継ぎ櫻樹を栽植保護した爲め、今日櫻と云へば世人が直ちに吉野を想像するが如く有名になったのである。」（本多静六「吉野山の桜制復古」）

王政復古の号令と史蹟保存・保勝会の活動

『吉野町史下巻』・西村幸夫『都市保全計画 歴史・文化・自然を活かしたまちづくり』 東京大学出版会、平成16年）

明治12（1879） 保晃会（日光山内の二社一寺の保存）

明治14（1881） 京都保勝会（五畿内江丹の名勝古蹟を永遠に保存）

明治15（1882） 談山保存会（奈良 談山神社の保存）

明治27（1894）2月3日 吉野公園設置（奈良県告示19号）

明治28（1895頃） 月瀬保勝会（奈良所在の月瀬梅林の保存）

～

明治44（1911） 史蹟名勝天然紀念物保存協会

大正5（1916） 財団法人吉野山保勝会設立許可

本多静六「吉野山の桜制復古」の方法論（大正10年10月11日）

「予は茲に大正十年十月十一日樹木に最も縁深き大日本山林會の視察團員五百餘名と共に吉野に到り、之を現状に徴し之を古に考へ無量の感に絶えず、遂に中の千本の櫻樹下に立て吉野の櫻制復古を提案した。所が團員舉つて之に賛同せられ、忽ちにして千二百餘本の寄進があつたが、之を動機として今後此處に來るものは多少を論ぜず櫻樹の御寄進あらんことを希ふ次第である。」

「其費用は苗木は二三年生四五尺位のもの一本の代價五錢で奈良農林學校實習地より供給し、其植付費は同じく一本に付五錢とし、之に五ヶ年の手入費十錢合計二十錢として吉野山保勝會に於て其植付保護手入を請負ふとの事であるから、若し自分に都合悪く直接櫻樹を植栽することの出来ない人は、保勝會に宛てゝ一本二十錢の割で寄附してほしい。」

「若し夫れ實行の方法に至つては先づ現在の上、中、下各千本の位置の内外に増植するは勿論、田畑の畦畔或は路傍等凡そ吉野全山の各地、特に櫻の臺附近より見ゆる幾十の峯巒の山嶺八合目以上は悉く櫻樹を植栽しやうと云ふのである。由來峯の八合目以上は土地粗惡にして杉や檜を植栽しても損益相償はないものであるから、寧ろ櫻樹を植栽して其山の價値を向上し、櫻の本家を復古する事が單に之を經濟上より見るも直接間接將來に有利であるばかりでなく、吉野山として最も意義ある事と信ずる。」

「櫻樹を寄附 本多博士の發起で

率先櫻樹三十本を寄附し参加者に勧誘した結果一千本餘の寄附申込があつた」

（大阪朝日新聞（大和版）大正10年10月15日付）

「以上の方法によつて、遂に各峯通りは一面に櫻となつたならば、之を吉野山より遠望すれば溪谷の杉檜林は見えなくて峯の櫻ばかりが見えるから、恰も古歌の 吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり の如き状を呈するであらうと思ふ。」（「吉野山の桜制復古」）

吉野熊野国立公園（昭和 11 年 2 月 1 日）

（本多静六「吉野及び熊野、大山 國立十二公園（七）」東京朝日新聞 昭和 7 年 10 月 16 日付）

「本國立公園は吉野山、大峰山、大台ヶ原を中心とするいはゆる吉野群山、これより發する北山川及び紀州より熊野に到る海岸一帶の三大風景要素から成り立ち、これ等は南北に連絡し、山岳より峡谷に峡谷より海岸へと巧なる配置を以て構成せられてゐる。吉野山は櫻の名所であり、南朝の歴史を物語る山であつて、大峰山は富士、御岳、立山等と同じく大峰入といつて多数修験者の信仰的登山を以て古くから著名である。」

（2）本多静六「土倉翁造林頌徳記念の磨崖碑」 土倉庄三郎 大正 6 年 7 月 19 日逝去

（本多静六「土倉翁造林頌徳記念ノ磨崖碑及び同翁ノ略歴」本多静六編集兼発行、大正 10 年 10 月 8 日、東京大学森林風致計画学研究室所蔵 傍線筆者）

「故土倉庄三郎翁は吉野林業中興の祖にして實に我邦造林界の指導者たり、今日日本の造林業は範を吉野に採り、今日日本の造林學は其應用を吉野に学びたりと稱するも敢て溢辭に非ず。不肖静六過て東京帝國大學に造林學の講座を擔ふこと茲に三十年而も其當初學びたる吉野の造林法と獨逸造林學の學理とに豫りて漸く今日の造林學を組成せるものなり、而して其吉野の造林法とは實に土倉翁に就て學びたるものなり。」

「歲月流るゝが如く翁逝て三年なる大正九年の春、學生と共に吉野を訪ふ。大瀧川の流れは依然たるも翁の山林は著しく變じ予が翁監視の下に間伐して翁が「長く先生の記念林となす」と云はれたる山林も今は伐採せられて再植の幼林となれり。星移り物變るは時相の定めとは云へ坐るに往時を廻想して轉た感慨に堪へざるものあり。乃ち碑を以て造林上に於ける翁の功徳を長へに傳へ一は予が翁に對する感謝の意を表せんと決意せり。而して翁の豪宕不羈なる性情に鑑み我邦未曾有の廣大なる大磨崖碑を造らんと欲し翁の郷里大瀧村字鎧掛に於ける吉野川沿岸の絶壁に地を相せり」

「嗚呼、土倉翁の功業や冀くは此碑と共に、永久に傳へて、以て我國林業の發達に光輝あらしめんことを

大正十年十月一日 本多静六 誌」

結びにかえて <桜>と<杉>の文化的景觀 - 祈りと実践 -

「世界遺産紀伊山地の靈場と参詣道(平成 16 年)」

（「登録の価値証明 文化的景觀の真実性及び完全性」『世界遺産 紀伊山地の靈場と参詣道』

世界遺産登録推進三県協議会（三重県 奈良県 和歌山県）、平成 17 年）

「紀伊山地は伝統的に林業の盛んな地域であり、線状にのびる参詣の道や川に沿って展開する森林の多くはスギやヒノキを中心とする人工林となっている。これらの森林において長年継続されてきた林業は、信仰の山の経済的基盤ともなってきた重要な地場産業であり、人工の景觀は参詣の道や川とともに信仰の山の文化的景觀を構成する重要な要素となっている。それらの地域は推薦資産の緩衝地帯に含まれ適切な管理が行われていることから、推薦資産と一体となった緩衝地帯の全域において、文化的景觀に関する完全性の条件は十分に保持されている。」（傍線筆者）

参考文献 （引用箇所は研究上、原文表記を尊重し適宜句読点を補った）

天野孝之「衰退してきた吉野山の桜」『山林』1307 号、平成 5 年）

五十嵐敬喜・岩槻邦男・西村幸夫・松浦晃一郎『神々が宿る聖地 世界遺産 熊野古道と紀伊山地の靈場』（株式会社ブックエンド発行、平成 28 年）

牛窪弘善「神變大菩薩傳」『修験』第 53 号、聖護院門跡内修験社、昭和 7 年）

大久保利武述『不二道孝心講』（鳩ヶ谷・岩谷活版所刊、明治 39 年 11 月、川口市教育委員会所蔵）

岡本貴久子『記念植樹と日本近代 林学者本多静六の思想と事績』（日文研叢書 53、思文閣出版、平成 26 年）

岡本貴久子「富士山信仰と近代日本の森づくり」『BIOSTORY』22 号、生き物文化誌学会、誠文堂新光社、平成 26 年）

大阪朝日新聞社編『人物畫傳』（有樂社、明治 40 年）

貝原篤信「和州巡覧記」(元禄九年)『益軒全集卷之七』(益軒全集刊行部、明治44年)

貝原篤信「和州芳野山勝景図」(正徳3年、国会図書館蔵)

岸田定雄『吉野山独案内』に見える民俗『ビブリア』74号、天理図書館報、昭和55年)

岸田日出男「吉野熊野国立公園についての感想」『修験』83号、昭和12年)

宮内庁『明治天皇紀第六巻』(吉川弘文館、昭和46年)

児玉幸多編「二宮翁夜話」『二宮尊徳』(中央公論社、昭和57年)

國學院大學博物館編『富士山 ―その景観と信仰・芸術』図録(國學院大學博物館、平成26年)

佐藤俊樹『桜が湧った「日本」 ―ソメイヨシノ起源への旅』(岩波書店、平成18年)

島原泰雄編『飛鳥井雅章集上・下巻』(古典文庫、平成4、6年)

土倉祥子「土倉庄三郎小伝 林業先覚者群像(3)」『山林』1016号、昭和44年)

中村賢太郎「本多静六先生」『林業先人伝』別刷、昭和37年、東京大学林政学研究所蔵)

中村賢太郎「本多静六先生の思い出」『山林』814号、昭和27年)

土倉正雄・土倉宣子監訳・夏聖禮・趙俊祥・江中信著『百年滄桑 土倉龍次郎と臺北亀山水力発電所』土倉正雄発行、平成18年)

西村幸夫『都市保全計画 歴史・文化・自然を活かしたまちづくり』(東京大学出版会、平成16年)

福田秀一「紀行文学の魅力」『国文学 解釈と鑑賞』平成元年12月号、18-23頁)

本多静六『本多静六体験八十五年』(講談社、昭和27年)

本多静六『新人生観と新生活』(伊豆美書房、昭和23年)

本多静六『土倉翁造林頌徳記念ノ磨崖碑及ヒ同翁ノ略歴』(大正10年10月8日、東京大学森林風致計画学研究所蔵)

本多静六「吉野山の櫻制復古」『颯風』大正10年12月・『大日本山林會報』472号、大正11年)

松永有慶・山折哲雄・田中利典・池田淳『神仏和合で日本の自然が守られてきた』(紀伊山地三霊場フォーラム、平成29年)

宮城言雅「國史より見たる吉野熊野国立公園地帯」『修験』97号、昭和14年)

山田廣圓・高井善證『修験大綱』(神變社、昭和8年)

吉野山人謡春庵周可撰『吉野山独案内巻一』(寛文11年・国会図書館蔵・古板地誌研究会、昭和46年)

渡邊金造『鳩ヶ谷三志』(文進社、昭和17年)

名著出版復刻版「あしなみ」(78号、山村民俗の会、昭和37年)

名著出版復刻版「あしなみ」(156号、山村民俗の会、昭和52年)

「飛鳥井雅章卿吉野一覽記」(卷子本、明暦3年、国文学研究資料館所蔵)

『小谷三志著作集IV 鳩ヶ谷市の古文書十六』(鳩ヶ谷市教育委員会、平成3年)

『世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道』(世界遺産登録推進三県協議会(三重県 奈良県 和歌山県)、平成17年)

『草創期における林学の成立と展開』(農林水産奨励会、平成22年)

「総本山金峯山寺」(金峯山寺リーフレット)

『大日本山林會大和之印象』(大和山林會撮影、大正10年11月、成瀬匡章氏所蔵)

『大日本農會・大日本山林會・大日本水産會創立七拾五年記念』(昭和30年)

『日本の国立公園』(環境省自然環境局国立公園課、平成28年)

『明治神宮叢書第十二造宮編一』(明治神宮、平成12年)

『明治二十三年洋行日誌 附・学位試験及び学位授与式の景況(明治二十五年)』(本多静六博士を記念する会、平成10年)

『吉野町史上・下巻』(吉野町、昭和47年)

『吉野林業』(奈良県農林部、平成25年)

「吉野公園の植林」『大日本山林會報』257号、明治37年)

「吉野川上郷に於ける造林實習見聞録」『大日本山林會報』256号、明治37年)

<謝辞> 本研究に際し、多大なご協力、ご助言を下さいました関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

※ 本資料の無断転載はご遠慮ください